

大学生における人間的成長の構造

—大学生人間的成長尺度の開発—

堀井 俊章

Structure of Personal Growth in University Students

Toshiaki HORII

問題と目的

平成 12 年 6 月に当時の文部省（現文部科学省）から「大学における学生生活の充実方策について（報告）」（文部省, 2000）が打ち出され、大学教育において、正課教育だけでなく、正課外教育も含めた大学生活全般の中で、大学生の人間的な成長を図ることが要請された。また、平成 20 年 12 月の中央教育審議会による「学士課程教育の構築に向けて（答申）」（文部科学省, 2008）においても、大学の学士課程を充実させ、大学生の成長を実現することが強く求められた。これらの要請を背景に、今日多くの大学が教育理念や教育目標等の中で、専門性の向上だけでなく、人間的な成長の促進も謳っている。

学生相談の面からも、上記の文部省の報告では、「学生相談は全ての学生を対象として、学生の様々な悩みに応えることにより、その人間的な成長を図るもの」（文部省, 2000）と明記されている。また、平成 19 年 3 月の日本学生支援機構による報告「大学における学生相談体制の充実方策について」（日本学生支援機構, 2007）では、学生相談（学生支援）の使命として、「個々の学生の大学期における人間的成長を支援する」と記述されている。

これらの記述からも分かるように、大学教育および学生相談において、大学生の人間的成長という概念は今日重要な位置づけを担っている。そして、その背景にはこれまでの数多くの人間的な成長に関する知見の蓄積があり、堀井（2017）は展望論文「大学生の人間的な成長に関する研究の動向」として整理している。

従来、臨床心理学の領域では、大学生の人間的な成長（personal growth）を扱った事例研究の例は枚挙に暇がない。また、理論研究という面からも、様々な学派から理論的展開がなされている。従来の事例研究や理論研究は実証的裏付けに乏しいという批判がある中、近年はストレスフルな出来事後に生じる成長、すなわちストレス関連成長（stress-related growth）や心的外傷後成長（posttraumatic growth）について、数量的にアプローチした研究が盛んに行われるようになった（東・伊藤, 2022；堀井, 2017）。また最近では、就職活動を通しての自己成長（self-growth through job-hunting）に関する研究も発展してきた（堀井, 2017；増淵, 2019）。これらの研究は成長を扱った実証的研究としては意義がある。しかし、トラウマとなるような強いストレスを受けるという特殊な経験や、就職活動という特定の活動により生じる成長を扱った数量的研究

であり、日常の大学生活全般を通して人間的に成長した事柄やその実感を扱った数量的研究ではない。

今日、多くの大学は、教育理念や教育目標等の中で人間的な成長の促進を謳うようになったが、大学生自身が人間的な成長を実感していないのであれば、大学の発するスローガンは説得力を失うことになる。前述した「大学における学生生活の充実方策について（報告）」は、副題として、「学生の立場に立った大学づくりを目指して」と付されている。大学生の立場に立った大学づくりを推進するのであれば、大学生自身の人間的な成長の実感を把握し、その結果を大学の教育改善に生かすことは大学の責務であると考えられる。

また同様に、学生相談の役割や使命が「大学生の人間的成長を図ること」であれば、学生相談の効果を検証するためにも、大学生自身の人間的成長の実感を確認する必要がある。その確認方法の一つが人間的成長の実感を客観的に測定する心理尺度の利用である。そのような心理尺度が新たに開発されることになれば、大学教育や学生相談の効果検証が可能となり、それに留まらず、人間的成長の促進・阻害要因や形成メカニズム等を解明する研究も可能となる。その結果を基に、人間的成長の実感を高めるための教育指針を作成し、その成果を実際の大学教育の場に還元し、大学生全体の人間的成長に資することが期待できる。

そこでこれから大学生における人間的成長の実感を測定する有用な心理尺度を開発していく。本研究では、その第一段階として、大学生自身が実感している人間的成長の具体的内容を把握し、尺度項目を構成した上で因子構造を明確にする。あわせて尺度の信頼性（内的整合性）を検討することを目的とする。なお一般に、心理尺度は項目数が多すぎると測定時間が長くなり、利用者にとって敬遠されやすくなる。心理尺度の有用性を高めるためには、項目数をできる限り抑えることが求められる（菅原，2001）。そこで本研究では、項目数を抑えながらも信頼性の高い心理尺度を作成する。なお、本研究では従来の人間的成長に関する文献（堀井，2017 など）を参考に、大学生の人間的成長を「大学期における心理的資質・能力の獲得・伸長」と定義する。

予備調査

目的

大学生における人間的成長の実感を測定する尺度（以下、大学生人間的成長尺度）を作成する予備段階として、人間的成長の内容を幅広く収集、整理、分類することを目的とする。

方法

調査協力者は首都圏およびその近郊の6大学の大学生1,224人（男性670人、女性554人）であり、質問紙法による調査を2011年11月～2012年7月に実施した。調査協力者には、大学に入学してから人間的に成長したと感じる事柄（成長内容）について具体的な記述を求めた（複数回答可）。調査の際には倫理事項を文書および口頭で十分に説明し、同意を得た者を対象とした。収集されたデータに対しては、質的記述的研究法に基づきカテゴリ分析を行った。

結果と考察

大学に入学してから人間的に成長したと感じる事柄（成長内容）について、記述された総数（切片数）は 2,046 個であり、一人平均 1.67 個であった。カテゴリ分析の結果、6 カテゴリが生成された。

第1カテゴリは生活に関する成長内容、第2カテゴリは対人関係形成に関する成長内容、第3カテゴリは思考に関する成長内容、第4カテゴリは精神的健康に関する成長内容、第5カテゴリは他者尊重に関する成長内容、第6カテゴリは忍耐に関する成長内容であった。カテゴリごとの個数と割合を表1に示した。

表1 大学生における人間的成長の内容分類

番号	名称	個数	割合(%)
第1カテゴリ	生活に関する成長内容	722	35.3
第2カテゴリ	対人関係形成に関する成長内容	475	23.2
第3カテゴリ	思考に関する成長内容	242	11.8
第4カテゴリ	精神的健康に関する成長内容	215	10.5
第5カテゴリ	他者尊重に関する成長内容	215	10.5
第6カテゴリ	忍耐に関する成長内容	177	8.7
計		2046	100.0

人間的成長の内容は、個々人特有と思われる内容も一部では見られたが、大学生における全体的な傾向として、一定の共通する内容が存在することが確認された。また、その内容は主に心理的資質・能力の獲得・伸長を表すものであった。

本 調 査

目的

大学生人間的成長尺度を作成し、因子構造を明確にする。あわせて尺度の信頼性（内的整合性）を検討することを目的とする。

方法

1) 調査協力者・調査時期・手続き

首都圏およびその近郊の4大学の大学生560人（男性258人、女性302人）を対象とし、2013年2月に個別無記名式の質問紙調査を実施した。調査の際には倫理事項を文書および口頭で十分に説明し、同意を得た者を対象とした。

2) 質問紙の構成

予備調査の結果に基づきワーディング処理を行い、学生相談に従事する臨床心理士5名が内容的妥当性を備えていると判断した100項目を大学生人間的成長尺度（予備尺度）とした。

教示文は「あなたは大学に入学してから、以下の項目で書かれた事柄について、どの程度」で

きるようになった」または「できるようになっていない」と感じていますか。あてはまるものに○をつけてください」とした。各項目に対する回答の選択肢は、「非常にできるようになった（6点）」「かなりできるようになった（5点）」「ややできるようになった（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりできるようになっていない（2点）」「ほとんどできるようになっていない（1点）」「全くできるようになっていない（0点）」の7件法である。得点が高いほど各項目の表す人間的成長による心理的資質・能力を獲得・伸長した実感が高いことを意味する。

結果と考察

1) 項目分析

大学生人間的成長尺度 100 項目（予備尺度）について不良項目の確認を行った。不良項目は、(a) 平均プラス標準偏差の値が上限値である 6 を越えている項目（天井効果をもつ項目）、(b) 平均マイナス標準偏差の値が下限値の 0 を下回っている項目（フロア効果をもつ項目）、(c) 平均値が 1 以下、あるいは 5 以上の項目（弁別力の低い項目）、(d) 項目間の相関係数の絶対値が.70 以上の項目（類似項目）とした。その結果、該当する 2 項目を除外した。

2) 因子分析

残りの 98 項目に対して、因子分析（主因子法・プロマックス回転）を行った。固有値 1.0 以上、固有値の落差、累積寄与率 50%以上、因子の解釈可能性という基準から 6 因子を抽出し、各因子の負荷量.40 以上となるよう、回転と項目の取捨選択を繰り返した。尺度の有用性を鑑み、各因子の負荷量上位 5 項目ずつを抽出し、最終的に得られた因子パターンを表 2 に示した。尺度は概ね単純構造を示し、6 因子の累積寄与率は 59.58%であった。因子間相関は.30～.57 を示し、中程度以下の相関であった。なお、多母集団同時分析により因子構造に性差はほとんど見られないことが確認されている。

第 1 因子は、「友達を増やせる (.91)」「人づきあいが上手にできる (.77)」などに高い負荷を示した。対人関係を構築・拡大し、良好な関係性を形成する力を表すため「対人関係形成力」と命名された。第 2 因子は、「ささいなことは気にしないでいられる (.77)」「物事を前向きに考えられる (.66)」などに高い負荷を示した。神経過敏ではなく、前向きに物事を考え、余裕を持てる力を表すため「精神的健康力」と命名された。第 3 因子は、「相手の気持ちに共感できる (.63)」「友達を大切にできる (.62)」などに高い負荷を示した。他者に共感し、友達や親を尊重する力を表すため「他者尊重力」と命名された。第 4 因子は、「イヤなことも我慢できる (.69)」「嫌いな人とも話せる (.62)」などに高い負荷を示した。嫌いなことや嫌いな相手でも我慢する力を表すため「忍耐力」と命名された。第 5 因子は「物事を論理的に考えられる (.70)」「幅広い考え方ができる (.65)」などに高い負荷を示した。物事を論理的に深く幅広く考える力を表すため「思考力」と命名された。第 6 因子は「時間を守る (.69)」「約束を守る (.67)」「金銭管理ができる (.46)」などに高い負荷を示した。約束を守り、時間や金銭を管理する力を表すため「生活力」と命名された。

表2 大学生人間的成長尺度の因子パターンと各項目の平均値・標準偏差

項目	因子						M	SD
	F1	F2	F3	F4	F5	F6		
第1因子：対人関係形成力 ($\alpha = .87$)								
友達を増やせる	.91	-.01	-.03	-.03	-.10	.06	4.12	1.31
人づきあいが上手にできる	.77	.06	-.01	.01	-.05	.07	3.84	1.28
いろいろなタイプの人と仲良くなれる	.71	-.07	.13	.11	.11	-.22	4.12	1.38
親しい友達をつくれる	.65	.08	.18	-.06	-.19	.20	4.34	1.32
知らない人にも話しかけることができる	.60	-.02	.01	.00	.19	-.11	3.86	1.56
第2因子：精神的健康力 ($\alpha = .83$)								
ささいなことは気にしないでいられる	-.14	.77	.06	.03	-.02	-.11	3.42	1.60
物事を前向きに考えられる	.21	.66	.00	-.05	.07	-.05	3.84	1.35
こころに余裕が持てる	.05	.63	.11	-.05	.09	.04	3.60	1.34
ストレスを上手に解消できる	-.05	.63	.11	.01	.02	.00	3.53	1.38
気持ちの切り替えができる	.16	.58	-.19	.16	.05	.07	3.64	1.37
第3因子：他者尊重力 ($\alpha = .81$)								
相手の気持ちに共感できる	.05	-.08	.63	.23	-.07	-.07	4.29	1.08
友達を大切にできる	.16	.09	.62	-.04	-.05	.05	4.67	1.10
親に感謝できる	.00	.14	.62	-.17	-.05	.03	4.74	1.19
相手の身になって考えることができる	-.05	-.06	.61	-.01	.34	.03	4.20	1.13
人を思いやることができる	.07	-.03	.55	.20	.02	.00	4.37	1.12
第4因子：忍耐力 ($\alpha = .76$)								
イヤなことも我慢できる	-.09	.04	.00	.69	-.05	.04	4.03	1.27
嫌いな人とも話せる	.26	-.16	-.11	.62	.01	-.05	4.03	1.23
自分の怒りを抑制できる	-.17	.28	-.05	.61	-.09	.10	3.89	1.49
人と対立しても折り合いをつけられる	.03	.06	.03	.55	.04	.03	3.99	1.15
周りに自分を合わせるすることができる	.05	-.02	.26	.54	-.06	-.02	4.29	1.20
第5因子：思考力 ($\alpha = .76$)								
物事を論理的に考えられる	-.05	.01	-.12	-.08	.70	.09	3.74	1.28
幅広い考え方ができる	.12	.04	-.06	.13	.65	-.06	3.85	1.18
物事を深く考えられる	-.02	-.07	.24	-.15	.59	.09	4.08	1.31
既存の考えにとらわれない新しい発想を生み出せる	.00	.21	.04	-.09	.56	-.13	3.28	1.40
一步引いて物事を考えられる	-.16	.02	.00	.27	.49	.07	3.80	1.16
第6因子：生活力 ($\alpha = .72$)								
時間を守る	-.04	-.12	-.02	.01	.02	.69	3.99	1.52
約束を守る	-.10	-.02	.18	.06	.01	.67	4.43	1.17
金銭管理ができる	.03	-.03	.01	.05	.04	.46	3.76	1.38
体調管理ができる	.05	.09	-.02	-.02	-.04	.44	3.93	1.36
人に言われる前に行動できる	.28	-.02	-.16	.01	.30	.42	3.51	1.22
因子間相関								
	F1	F2	F3	F4	F5	F6		
F1	—	.52	.57	.45	.54	.42		
F2		—	.30	.47	.46	.32		
F3			—	.57	.56	.43		
F4				—	.49	.43		
F5					—	.50		

3) 信頼性と性差

大学生人間的成長尺度の因子別に、当該因子に負荷量 .40 以上を示した項目のまとまりを下位尺度項目とし、項目の粗点の合計を下位尺度得点とした。下位尺度別に項目分析（G-P 分析と I-T（項目—全体）相関分析）を行い、すべての項目が有意であることが確認された上で、Cronbach の α 係数を算出した（表 2）。その結果、 α 係数は.72～.87 を示し、大学生人間的成長尺度全 30 項目は、心理尺度として一定水準以上の信頼性（内的整合性）をもつことが確認された。

各下位尺度得点の平均・標準偏差および性差については表 3 に示したとおりである。「対人関係形成力」と「他者尊重力」において、女性の得点が男性よりも有意に高かった。したがって、大学期において、対人関係を形成する力や他者を尊重する力を獲得・伸長した実感は、女性が男性よりも強いことが示唆された。

表 3 大学生人間的成長尺度の全体・性別得点および性差

尺度	全体 (n=560)	男性 (n=258)	女性 (n=302)	t
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
対人関係形成力	20.28 (5.53)	19.49 (5.75)	20.96 (5.25)	-3.17**
精神的健康力	18.03 (5.44)	18.22 (5.79)	17.87 (5.13)	0.77
他者尊重力	22.28 (4.25)	21.68 (4.54)	22.78 (3.93)	-3.09**
忍耐力	20.23 (4.57)	20.12 (4.50)	20.32 (4.62)	-0.52
思考力	18.76 (4.51)	18.93 (4.97)	18.61 (4.09)	0.85
生活力	19.62 (4.57)	19.32 (4.78)	19.88 (4.36)	-1.46

** $p < .01$

まとめと今後の課題

本研究では、大学生における人間的成長の実感を測定する心理尺度を開発するにあたり、その第一段階として、大学生自身が実感している人間的成長の具体的内容を把握し、尺度項目を構成した上で因子構造を明確にし、あわせて尺度の信頼性（内的整合性）を検討することを目的とした。

その結果、大学生人間的成長尺度は「対人関係形成力」「精神的健康力」「他者尊重力」「忍耐力」「思考力」「生活力」の 6 因子構造であることが明らかにされ、また、心理尺度として一定水準以上の信頼性（内的整合性）をもつことが確認された。

なお、大学入学時と現時点の心理的資質・能力を比較して、その変化量を成長と捉える場合には、縦断調査を行い、各項目についてそれぞれの時点において、自分に「あてはまる」か「あてはまらない」か、その程度を尋ねる形式にすることも可能である。しかし、本調査では、大学生が大学入学以降、人間的成長による心理的資質・能力をどの程度獲得・伸長したと実感し

ているかを測定するために、今回のような教示と選択肢を設定した。大学生人間的成長尺度の信頼性（安定性）と妥当性について検討した結果については別稿で報告する。

【付記】本研究は JSPS 科研費 24653192 の助成を受けて実施された。

引用文献

- 東 明奈・伊藤 大輔 (2022). 心的外傷後成長に関する研究動向とその展望——適応的側面と非適応的側面に着目して—— 発達心理臨床研究, 28, 21-28.
- 堀井 俊章 (2017). 大学生の人間的な成長に関する研究の動向 横浜国立大学教育人間科学部 紀要 I (教育科学), 19, 163-181.
- 増淵 裕子 (2019). 大学生における就職活動を通しての自己成長に関する研究の動向 学苑=Gakuen, 940, 55-61.
- 文部科学省 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (答申). Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (2022年9月20日)
- 文部省 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告) ——学生の立場に立った大学づくりを目指して——. Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm (2022年9月20日)
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について——「総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」——. Retrieved from <https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/jyujitsuhosaku.html> (2022年9月20日)
- 菅原 健介 (2001). 心理尺度の作成方法. 松井 豊 (編) 心理測定尺度集Ⅲ——心の健康をはかる<適応・臨床>—— (pp.397-408) サイエンス社